

## 研究するテーマは 身の回りの日常にある。 見つけるのも、 事実に迫るのも皆さん自身だ。

あらゆる社会現象を対象とする社会学には、数えきれないほどの理論がある。そのなかで、篠木先生の扱う対象は、とってもし身近な社会現象だ。

しかし、もちろんそこには基準がある。それは、みんなが何気なく見過ごしていた当たり前のことが、よく調べてみると本当は違っていったなど、新たな事実を発見するために対象に迫るということだ。

先生はそのための手法を教え、的確な道を示してくれる。しかし、発見するのは先生ではない、皆さんののだ。まだ誰も知らない事実の発見者となる社会学へ案内しよう。

## 当たり前のことに 気づき、考える 意識が第一歩

世の中には、常識だと思っていたことが実はそうでなかったりする場合がしばしばある。皆さんのなかにも経験がある方がいらっしやるのではないだろうか。篠木先生のゼミで扱われるのも、日常で起こるそんな社会現象だ。

「私のゼミでは、身の回りで当たり前のように過ぎていく事柄のなかから、各自が興味をもてる現象を選び、その現象を調べる能力を養うことを

目的としています」

したがって、扱われるテーマは実に幅広い。そこでまず求められるのが、身の回りの物事に疑問をもったり、関心を向けたりする意識だ。

「身近な例で説明しましょう。多摩キャンパスの正門近くで『野菜の無人販売』を行っている農家があるのですが、その前をただ単に毎日通り過ぎるだけの人もいれば、『なぜこのシステムが成立しているのか』と考える人もいると思います。

このシステムは、物を買ったらお金を支払うという住民の「常識」を信頼しているから成立すると考えら

れます。では『信頼』とは社会のなかでどのように機能するのでしょうか。このような疑問を持ったときに自らが対象とするテーマと出合うチャンスが訪れるのです。そのためには、日頃から『なぜ?』と考えられるように意識して練習しておく必要があります」

篠木先生自身の研究テーマも身近な社会現象のなかにある。

「わざわざそうしようと思っていないにも関わらず、社会的にみるとあまり望ましくない結果になってしまっている物事が社会の中ではしばしばみられます。例えば『官僚制』

先生が取り組まれている  
環境問題の論文。



先生の研究テーマが分かる  
2冊の著書。





篠木 幹子 (しのき みきこ)

東北大学大学院文学研究科人間科学専攻博士後期課程単位取得満期退学。日本学術振興会特別研究員、岩手県立大学総合政策学部准教授、中央大学総合政策学部准教授を経て現職。専門分野は環境社会学、計量社会学。著書に『環境問題へのアプローチ—ごみ問題における態度と行動の矛盾に関する正当化メカニズム』、『個人と社会の相克—社会的ジレンマ・アプローチの可能性』(共著)。

はそもそも業務の効率化を図って分業され作られた仕組みであるにも関わらず、お役所では、頼みごとがたらい回しにされたり、なかなか迅速な処理がなされないことがあります。ではなぜ、そうした事態が生じ

ているのか。その原因を人間行動との関連のなかで説明していきたいと考えています」  
では、篠木先生はどんな方法でそのメカニズムを説明するのだろうか。

## 失敗して初めて分かる 役に立つ調査票作りの 難しさ

身の回りの社会現象に問題意識をもったとき、そこから現実の社会の中におけるさまざまな発見に至る過程は、もちろん一つではない。しかし、篠木先生はそのなかでも「社会調査」の手法を重視している。

「社会調査」とは人びとの意識や行動などを把握するための手法である。皆さんも何らかのアンケートに記入した経験があるだろう。質問と回答欄が並んだその用紙は、一見すると訊きたいことを入れれば誰にも作れそうな気がするが、それは違う。「卒論で何を課題にするかによって、アプローチの方法はもちろん異なるのですが、学習のプロセスとして私のゼミでは『社会調査』と『統計分析』を全員が学んでいます。  
まず調査票(記入用紙)を作成し、次にその調査票を使って実際に調査を行ってデータを分析するステップを踏みます。『統計分析』の段階では、

統計ソフト(S.P.S.S)を使ってデータ分析する方法を学び、多様な変数の関係を明らかにする方法を習得します。

一連の体験のなかで失敗して初めて『5分でできる』と思えるような調査票作成がいかに難しいかが分かるんです。『問1で、はいと答え方はこちら』と質問していく枝分かれになっている質問が、いかに分析を困難にするのかも、実際に自分で分析してみると理解できます。

本年度は3チームに分かれ、それぞれ別のテーマで調査を行いました。『環境に配慮した行動に影響を与える要因とは何か』、『生活充実度は何によって規定されるのか』、そして『学生におけるアルバイトの意味は何か』というテーマとなっています。最初にこうであろうという仮説を立てて調査票を作るのですが、当然全てのチームがうまく仮説を検証できるわけではありません。しかし、互いの結果を批評し合いながら、楽しい雰囲気の中で『社会調査』の難しさを理解してもらっています。

社会に出てもさまざまな調査に接する機会が多いと思います。こうした経験は将来的にも応用がききますし、プラスになると思っています。

現在卒論に取り組んでいる4年生の調査票を見せてもらったのだが、その緻密さに驚いた。それはまさに知識や技術なしではできない精巧さだった。

## 同級生同士が批評し合い さらに、先輩の発表を 見ながら学ぶスタイル

さて、その精巧な調査票で発見しようと思った「なぜ？」は何だったのだろうか。篠木先生に本年度の卒論のテーマについて訊いた。

「卒論を書いた学生は、いずれも学生対象の調査を行いました。

一人は『ファッションの選択が何によって決まるか』を検証しています。そもそもファッションは個人の自由な選択によって決まっているよ

うにも見えますが、実はさまざまな要因によって制約を受けています。たとえば、家族の影響はほとんどないけれども、同性で憧れている人の真似をしたり、好意を寄せる人からの提案なら自分が好きではないファッションでも受け入れる傾向が見られました。また、ファッションセンスや容姿への自信、適切な服装に関する認知がどう影響するか、など多岐にわたって調べています。

もう一人のテーマは『褒める』ということとはどのような意味をもつかというものです。まず回答者の性格を、社交性などの質問によって分類し、挨拶のように意味もなく褒めたり、何かをさせるために戦略的に褒めたりなど、性格によって褒め方のタイプが異なるのかどうかを探っています。『自分がダメだと思っるときに、含みがある褒め方をされるとイライラする』など回答者の正直な気持ちも調査で把握することができました。この卒論では『褒める』という行為が、いかに人間関係に機能しているかを明らかにしています」

この「褒める」をテーマに選んだ学生は、サークルで先輩を指導する際に、角を立てず短所を指摘するために褒めることは必要なのか、あるいは長所を伸ばすためにはどう褒めたらよいか、などで悩んでいたようだ。彼女は、自分の悩み自体をテーマに選び、数々の発見をした。まさに身近な問題を社会学の題材に変えた格好の事例だ。

篠木先生の指導を段階的に受けながら結実した卒論は、学びを積み重ねることの意義を感じずにいられない。実は先生のゼミでは、こうした先輩たちを後輩たちが見習うことによって互いの知識を深めている。

「正規の授業のほかに全学年が集まるゼミも行うことで、先輩に先輩の議論を見せます。そこで、先輩たちがどう議論しているのかを学ぶことができます。

『質問を受けたときのために参考文献やほかの情報も調べておく』数式はしっかり説明できるよう把握す



グループ毎に分かれた調査テーマの検討に、篠木先生から鋭い指摘が入る。

る『現実社会への対応策を立てておく』など、先輩たちの発表スタイルを見ながら自主的に勉強し準備していますね」

篠木先生は「私は応援係です」と笑いながら言う。事あるごとに「最初は同級生や先輩と議論して、私に



風力発電を行う岩手の葛巻高原牧場で、岩手県立大学の学生と合同ゼミ合宿を行う。

うになって、感心して見ています」

### 高校生の皆さんへ

訊くのはそのあと」と話しているそうだが、そんな先生の意識が伝わってか、最近では先輩を見習うこのスタイルが浸透してきているとか。それだけでなく学生たちが自主的に始めた工夫もある。

「ある時期から、プレゼンテーションの報告者に対するコメントを作成するようになりました。よかった点や改善すべき点、あるいは『こうした方がいい』という提案を毎回、全員がコメントして報告者に渡しています。このシステムが定着してからプレゼンテーションの回を重ねるごとに成長しているのが分かるよ

篠木先生からいただいたメッセージは、冒頭でも挙げられた社会に対する意識のちがいに重きが置かれていた。

「私のゼミでは、ゼミ選択の際に『現在関心のあるテーマ』を書いてもらっています。関心というものはいきなりもてるものではないので、日頃から意識してアンテナを張ってほしいのです」

だからこそ、冒頭で挙げた「野菜の無人販売」の話が重要になる。そしてアンテナを張るのは、目で見られる事柄だけではない。

「例えば、自分が気になる言葉を誰かが言った場合、『どんな考え方をするとあの発言につながるだろう。そう言わない人はどんな考え方をしているんだろう』と考えてみる。このように、日常のさまざまな場面で好奇心をもって過ごしてほしいと思います。」

意識して考えることは、論理的な思考を身に付けることにもつながります。また、一つの現象を複眼的にとらえるという点も重視しています。

ゼミで行われる議論にもそんな意識で参加してほしいと考えています」

篠木先生の話は、さらにゼミのプレゼンテーションにおける心構えに移る。

「ゼミでプレゼンテーションするということは、他者に自分の意見を伝える機会をもつということです。ただし何かを発表すれば必ず他者からの反応があります。それを受け止めて対応できる精神力をもってほしいですね。私も、分らなければ分からないと言いますし、もう一回、もう一回と訊いていきます。提出された課題にも、気になる点には朱字で修正を入れて返しますので、それに応えてしっかりと書き直して提出してほしい。これらも一種のコミュニケーションだと思っています。そして、そうした経験を積み重ねて成長してほしいと願っています」